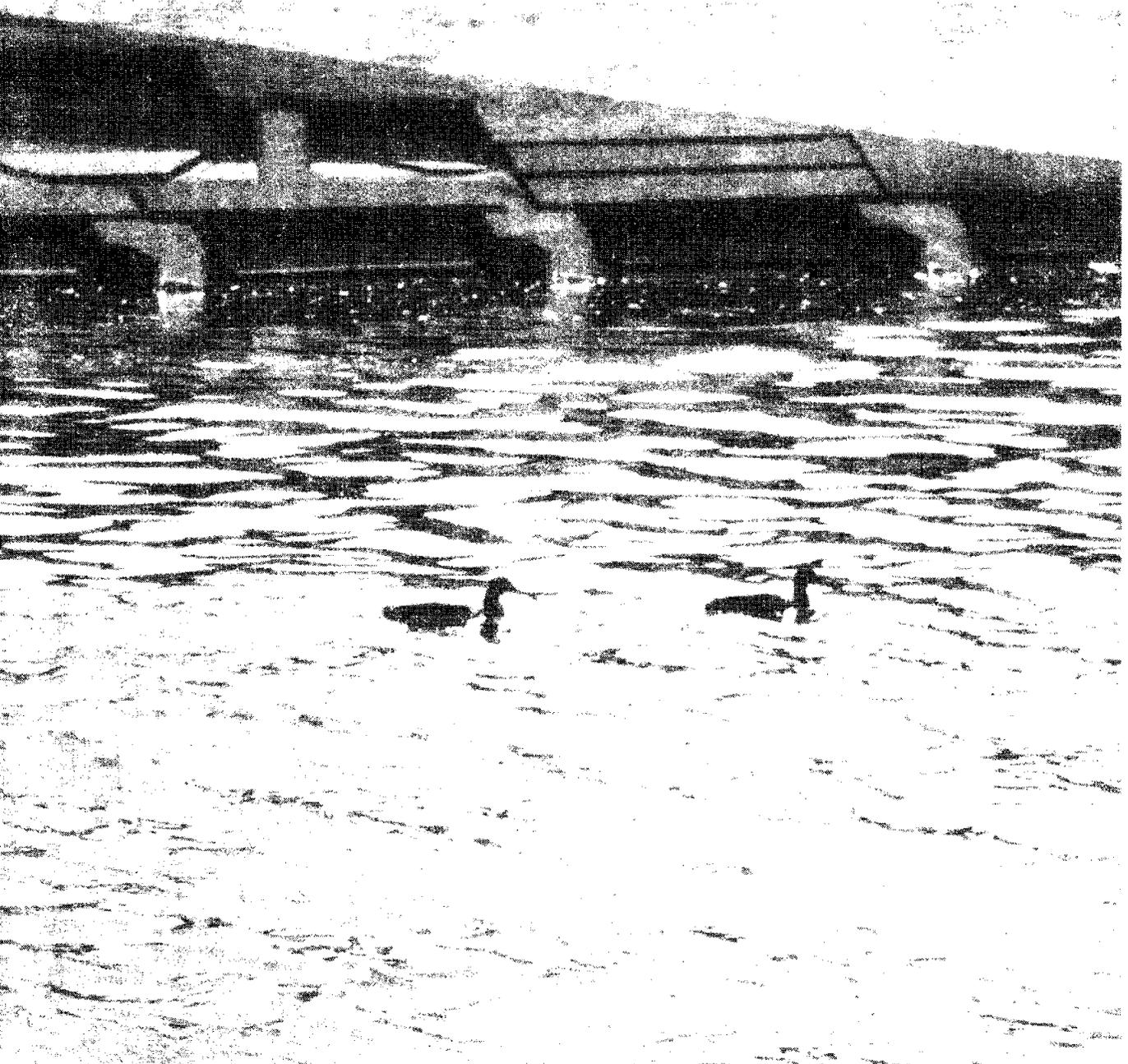


北海道自然保護協会会報
Nature Conservation Society of Hokkaido

1990年3月号

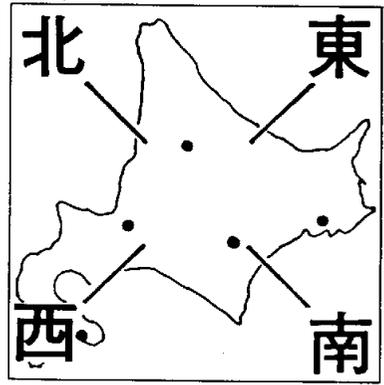
No. 70

NC HOKKAIDO



水ぬるむ新川

写真：福地 郁子



山野草との お付き合い



今村 成和

余り広くもないのだが、我家の庭には、
山草、野草の類が一面に散らばっている。
面白いのは、カタクリやエゾエンゴサク
が、永い間には意外なところから顔を出
すようになることで、カタクリは、植え
た所からは建物を挟んで北側の空地にも

ぼつんと一株咲いている。エゾエンゴサ
クも幅広くあちらこちらに散らばった。
どちらも風で飛ぶ種ではないのだから、
これはどうしたことかと思っていたら、
先日近ごろ出席しているカルチャー教室
で、講師のHさんから、蟻が運ぶのだと
教えられた。ついでに言えば、木の実草
の実は散布方法は外にもいろいろあるそ
うで、スライドを見乍らの二時間は中々
面白かった。

山野草の入手先は、大抵春の園芸市だ。
期間の長い中島公園の市には、最初は早
過ぎて次は中頃と二回は出向くことが多
い。その外デパートの園芸売場。お馴染
みの園芸店は小樽にもある。

もう今更植える場所もないのに、と思
い乍らも欲しいものがあればつい求めて
帰る。庭に戻れば、何処かに空き地はあ
るものだ。それにいつかは、思いも掛け
ず消えてしまうものもないわけではな
い。ロックガーデンも時には植え換えて
やらないと駄目になると聞いたことがあ
るが、園芸店で求めてきたホテイアツモ
リソウの一株が、たった一茎の花を次第
に増やして十ほどになったある年、俄に
衰滅してしまったのは本当にがっかり
した。こんなこともあるので、庭の植物
は、種類の上でも次第に更新されている
のである。

クジュソウも各所に飛び散り、クロユリ
やほととぎすは回りにどんどん勢力範囲
を広げている。円山近くの友人の家の庭
とはまるで植物の様相が違うのだが、こ
うして見るとどうやらこの場所は、湿度
の高いところが好きな植物達の安住の地
らしい。

外国種の子葉もこれらに混じって大
いに羽を延ばしている。アメリカ原産の
黄花のカタクリは在来種よりもずっと大
柄でよく増え、これもアメリカ系の八重
や長弁暗赤色のエンレイソウは、日本の
仲間とともに毎年見事な花を咲かせてい
る。昨年小さな鉢に勝手に潜込んで来て、
黄色い見知らぬ小花を咲かせた草があっ
たが、Hさんに写真をお見せしたら洋種
の姫月見草だということだった。

月に二度街のカルチャー教室に妻と一
緒に通っているのは、植物を主題に毎回
違う講師のお話を聞くためである。こ
れまでには、北海道の湿原や山野、時
には外国を舞台に、野草やきのこ、木の実
や山の花など様々に異なる自然の営みに
ついて、スライドを交えた専門家のお話
があった。それらをじっくり伺っている
と、我家の庭の狭い天地から、思いは遙
かな自然の大地へと果てしなく広がって
ゆく。そして今は最大の問題が自然保護
にあることが、言葉の端々からひしひし
と伝わってくるが、そのことと庭での山
野草との会話とが両立することを私はい
つも願っているのである。

の「札幌の野の花」の教室にも顔を出し
ているが、ここでは、身近なところでの
きめの細かい観察もあって、まだ名前だ
けしか知らなかった草木に意外なところ
で出会い楽しみも与えられている。山野
草との付き合いには、この外野山を歩くこ
とも付加えなければならないが、昔はと
もかく近頃では段々出不精になってき
た。その代わりが庭での逍遙のひと時だ
が、今はまだ厚い雪に覆われていて、春
を待つ毎日がこれからも暫くは続くだろ
う。だがそれだから、この北国の一番爽
やかな季節なのである。

(元北海道大学学長・札幌市在住)

激動の中・ 東欧と自然環境 ——トランシルヴァニア (ルーマニア)の場合——



石本 礼子

昨秋来、中・東欧諸国の改革があまり
にも劇的に連鎖的に展開したため、あた
かも「東欧」というひとかたまりの同質

地域であるかのように論じられたりするが、それではせっかくの歴史ドラマの本質を見誤まることなる。当該国はそれぞれ異なる民族・言語をもち、異なる国家起源・変遷を経た国々であり、長く中部ヨーロッパの政治史、文明史の華々しき舞台となり、民族の誇りはあくまでも高く、有為転変の相関関係にあった国々である。今や強権の中央指令体制が崩壊してみると、各国の素顔がいよいよはつきりして、どこまで「先祖返り」するのか、と心配になるくらいである。早くもドイツが元の一つに戻るうごきをめぐって、西欧諸国の心配が表面化している。

ハンガリーの場合、九世紀末に現在地に建国以来、中欧に君臨した大王国だった中世、ハプスブルク皇帝政府を内部から支えたオーストリアとの二重帝国時代以降、歴史的に今回ほど賢く振るまい、成功した例はなかったのではないか。一九五六年の「ハンガリー動乱」の悲劇以来、ソ連とはうまくやりながら、一貫して自由化を目指し、経済改革路線は既に六八年以来の既定方針で、ソ連はむしろこれに学んだと言えよう。今回も夏前から改革派政府が発足していたし、まったくのお膳立て通り、テンポが少し早まっただけで、五六年の悲願であった中立化と多党化、ついでに国名変更までやってしまった。

激動ドラマでまいったの予想外だったのがルーミアニアの独裁終焉、本ものの革

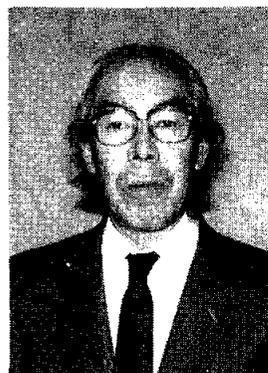
命の成功である。これはハンガリーにとっても望外の成果だった。というのは、現在ルーミアニアの国土のほぼ半分を占めるトランシルヴァニア地方（虐殺のあったティミショアラも同地域）は、建国以来ハンガリーの国土で、第一次大戦後ルーミアニアに割譲された地域であり、今も二〇〇万人のハンガリー人が住む、実質的にはハンガリー文化の故地なのである。独裁者C大統領はハンガリーが帝国主義的領土回復要求を持っていると宣伝し、西欧諸国の非難の的となった「ハンガリーの村打ちこわし政策」や、ハンガリー系住民いじめなど、千年以上もこの地で共存して来たハンガリー人とルーミアニア人を敵対させて、民衆の不満をそらすうとしていた。しかしルーミアニアはこの手には乗らなかったのだ。

私はルーミアニアではないその昔のハンガリーを訪ねて再度この地に入り、民話の世界さながらの、現代と隔絶したような自然と人にすっかり魅せられてしまった。皮肉なことにこれぞ独裁者の民政放置、対外隔絶政策の「成果」である。森は深く、緑は濃く、農民は昔ながらの大鎌で草を刈り、野はヒナゲンの群落で赤く染まり、菩提樹の巨木は芳香をあたりにまき散らし、コウノトリは沼地に舞いおりて何やら餌をあさる。おびたらしい数の古城は荒れたままに、中世の町並は昔のままに、街道に車の影は僅か（一日たった一車のガソリン配給のせい）、人々は肉を求めて徹夜で行列し、いつも

暗い表情で何かを探し、大半の精力を使い果す。ハンガリー人のための詳細な歴史・文化の解説付の旅行案内書を見ると（この案内書はこれまでルーミアニアへの持込み厳禁だった）、山中には野生動物が豊富で、大角鹿、リンクス、熊、狼も生息する、とあった。ヨーロッパの狼は絶滅しているはずなのに、これを否定する人はいなかった。民話に出て来る、魔女の棲むような洞窟や温泉があり、悪い妖精を追いつらうために燃やして煙を出すニワトコは、花を摘んでシロップをつくる。立ち寄っていつも水を飲んで行くように、と言いつつ伝えられた森の中の湧水は鉱泉水だった。現代ははるか遠く、いつしか狼の生存も否定する気にはなれない、ふしぎな世界だった。そしてまた皮肉なこと、経済改革の進むハンガリーの首都ブダペストはおびたしい車の排気ガスで立派な街路樹が立枯れる姿が眼につくのである。

（東京都在住）

日中愛鳥教育 交流視察



柳沢 信雄

○初めての中国

日本鳥類保護連盟の第二回訪中視察団の一人として、一九八九年十二月五日から十日十一日の日程で初めて中国江蘇省を訪ねた。

中国の愛鳥教育活動にも関心はあったが、それ以上に、すぐ隣りにあって古くから我が国と深い関わりを持ち、多大な影響を与えて来た大国、あの広大な国土に日本とは異なる社会体制の下で人々の生活がどのように営まれているのか、その実情を自分の目でたしかめ、肌で感じたいという気持が強かった。

江蘇省という限られた範囲だが、広大な平原に延々とびる平坦な直線道路、悠々と流れる長江は私に中国の広さを充分に感じさせてくれた。

又、上海や南京の大都市から地方の農

村まで、人と自転車の多いこと、歴史を感じさせる建物、寺院、庭園等々、更に新旧が入り乱れる家並み、貧富ごちゃまぜの雑然さ、その中でしたたかに生き抜いている人々の逞しい息遣いが、新しい国づくりの勢いを感じさせているように思えた。

○愛鳥教育活動

訪中第四日は終日南京市内の学校視察交流となった。

午前中は南京師範大学、午後は町中と郊外の小学校各一校を訪問した。

師範大学の周教授は中国野生動物保護協会、中国鳥類学会の理事でもあり、学生達に野生動物保護、環境教育の授業にあたられ、小・中学校での愛鳥教育は特に重要視されなければならないと、学生と一緒に小・中学校へ出かけ直接子ども達の指導にあたり、先生方との対話も行いなど精力的に活動されているとの事だった。

教授の指導を受けた卒業生が毎年確実に小・中学校の教師となり、大学や教授と緊密な連絡をとりながら各地で活動の輪を広げていると聞き、先生になる人を育てる段階で環境教育の基礎知識をしっかりと持たせ、更に卒業後の活動にも援助、協力の体制を確立していることをうらやましく思っていた。

午後は小学生達の熱烈な歓迎を受け、愛鳥教育に取り組む意欲が校舎内外の展示物、児童達や先生方からひしひしと伝わってくる教育現場に入った。

低学年では物語や音楽、遊戯等で鳥に親しみを持たせ関心を高める。高学年は鳥類の生態、人間生活との関係を知的に学ばせており、共に日々の教科学習の中に組み入れて実践しているとのことであった。

実際の授業は参観できなかったが、低学年が歌や踊りで学習成果の一端を見せてくれた。

日本でも環境教育が教科学習の中に位置づけられることを強く望みたい。

両校共、校長の説明だけで直接指導にあたる先生方との交流がなく生の声を聞くことが出来なかったのが心残りであった。

○視察・交流を終えて

マイクロバスで約二千米を旅したのだが、この間、野鳥との出会いが少なく物足りなかった。広々と続く田園風景のどこにも森や林が見られないのだ。鳥たちの生活の場が極端に少ないように思われる。

この環境で愛鳥教育はむずかしいだろうと思ったが、札幌の小・中学校でも同じこと、大小諸語の違いを互いに意識しながら、それを乗り越えて子ども達の心の壁にしっかりと染みつき消えることのない愛鳥精神を育むことが限りある地球に今を生きる我々大人共通の使命であると考える中国の多くの仲間に出会えたことを心から嬉しく思っている。

(愛鳥教育研究会北海道支部長・札幌市在住)

自然事典 21 耐凍性 豆

耐凍性

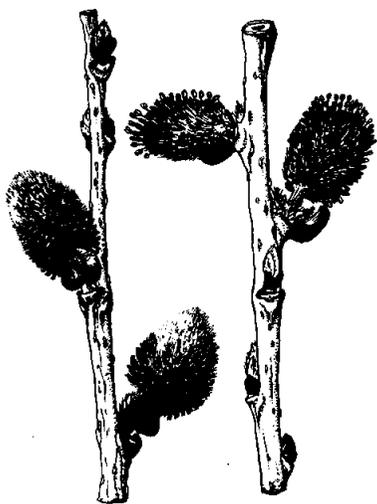
辻井達一 (北大農学部教授)

気温がマイナスになれば水は凍るが植物は体内の水が凍れば組織が破壊されてしまうので細胞液の濃度を高めたり、あるいは過冷却現象でこれに対抗したりする。その能力は植物の種類によって異なる。寒地や高山の植物では概して高い。

種類としてはヤナギはもっとも耐凍性が高いものとして知られ、マイナス七〇度Cでも耐える種類がある。

面白いことに同じ種類でも暖地で栽培すると耐凍性は低下し、寒地で栽培するとそれが向上することである。

ヤナギは昔から柳に風折れ無しか、柳腰の美女など優しい感じを表すのに引用される植物だが、きわめて強い生活力を持つ。そして成長も早い。水辺の植物というイメージが強いが、水の近くだけでなく乾燥地にも生える。低温乾燥は植物の生育にとってはもっとも厳しい条件であるから、こうした条件にも対応できる種類としてヤナギが選ばれることになる。南極でもテストされ、アイスランドの緑化にも用いられることがある。



Salix kullenii var. angustifolia
エムバッコヤナギ

講演会の 記録

一月から二月にかけて、次のとおり、当協会主催による講演会が札幌市教育文化会館で催された。いずれも多数の参加者があり、たいへん感銘ふかく、かつ有益な講演会であった。なお、さらにくわしい講演内容は「会誌」であらためて紹介される予定なので、ご期待いただきたい。

(一) リゾート開発の問題点

講師 宇都宮大教授 藤原 信先生

一九九〇年一月十一日午後六時半—九時、参加者約七〇名。

藤原先生は林業政策の専門家である。

当日の講演会では、リゾート法（総合保養地域整備法）、および最近成立したばかりの森林特措法（森林の保健機能の増進に関する特別措置法）の内容、問題点を逐一説明され、この二つの法律が、いかに民間企業に甘く、規制を緩和し、かつ乱開発を助長する仕組みになっているか、またこうした行政姿勢に反応して、リゾート企業が各地で暗躍している実態を浮き彫りにされた。北海道では、とくに貴重な自然が危機にさらされている。日本の国土の将来を憂い、乱開発に歯止めをかけるためには、住民運動、自然保護運動が大きな役割をはたすことを力説された。

なお藤原先生の森林特措法に対する批判は、「朝日ジャーナル」八九年十二月二二日から九〇年二月九日まで、七回にわたり、本多勝一氏との対談「日本列島に迫る巨大破壊の足音」として連載されているのでご参照いただきたい。

(二) ゴルフ場問題について

講師 日本消費者連盟 神原 昭子先生

ヒマラヤで環境を考える

講師 北大教授 小野 有五先生

一九九〇年二月六日午後六時半—九時、参加者約五五名。

① ゴルフ場問題について 神原先生は家庭の主婦として消費者運動などにたずさわり、ご主人（北大教授）の転勤にもなつて二年前から札幌の住民になられた。最近「北海道ゴルフ場問題情報ネットワーク」の呼び掛け人として活躍されている。

講演会では、最近北海道でおこったゴルフ場による農薬公害の恐ろしさをはじめ、ゴルフ場ブームによる乱開発が、人々の生活環境をおびやかす、健康・健全な衣食住に危機をもたらす、自然環境を破壊するばかりでなく、本来公共的であるべき自然を企業が困いこみ、さらには「すべてはカネ次第」で地域コミュニティまで破壊してしまふ実態を報告された。北海道では一三〇カ所のゴルフ場がある他に数十カ所の新設計画があり、厳しい規制が早急に必要であることを熱く訴えられた。

なお、神原先生編著によるブックレットに「もういりません・ゴルフ場」（七〇〇円）があり、当協会でも希望者に頒布している。

② ヒマラヤで環境問題を考える 小野

先生は北大大学院環境科学研究科教授で、地球科学の専門家である。

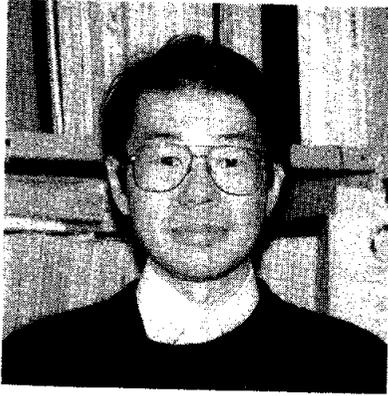
講演は、先生の研究フィールドであるヒマラヤの、すばらしい迫力のあるスライドを使って、参加者もヒマラヤにいるような臨場感の中ではじまった。いま地球の温暖化がいわれているが、ヒマラヤの氷河の消長や、氷河の氷に閉じ込められた「過去の大気」から、気候の変化を検証できることがまず説明された。つづいてヒマラヤの原住民が厳しい自然環境にいかに対応して、それなりに合理的な生活を営んでいるか、またそうした「風土」と表面的な自然保護とが矛盾をきたしており、自然保護とは何か、の原点にせまる問題提起もされた。現在のヒマラヤ周辺には地球環境問題の縮図が見られるという。

なお小野先生の「ヒマラヤで環境を考える」に関連した論文は「地理」一九九〇年一月号のついでに「興味のある方はお読みいただきたい。」

文責 当協会副会長

俵 浩三





名前の由来はレ・ミゼラブルの作家 ビクトル・ユーゴーです

北大大学院環境科学研究科

教授 小野 有 五

自然と人

インタビュー

福地 郁 子 (当協会常務理事)

今回は環境科学研究科で環境地理学を研究でヒマラヤや北極にも行かれ、昨年の暮には外務省の視察団で東欧四カ国をまわられるなど、今大変注目を浴びているお忙しい小野先生にお話を伺いました。

□先生は東京生まれの東京育ち、さらに東京教育大学を出られ、北海道との結びつきは。

■大学一年のとき大学院生で三井芦別を研究している人がおり、一緒に付いてきてひと夏そこで過ごしました。

大学院生になってから十勝と日高山脈の研究に、毎年夏、帯広のほうに友達と二、三カ月下宿して五〇ccのバイクで走り回っていました。

□そんなわけで、学位論文は「日高山脈の氷河地形と十勝平野」ということですね。そしてヒマラヤや北極など極限の地のご研究が多いですが、その目指すものは。

■地球の寒冷な所の環境に興味があり北海道を選んだのもそんなわけです。地質のほうでは「現在は過去の鍵である」という言葉がありますが、私たちは一万年も前の氷河のことを復元しようとしたら、今残っている氷河やツンドラになっている所を見ないといけません。そんなわけで最初ヨーロッパのアルプスの氷河や高い所のツンドラを見に行きました。またヒマラヤに行く機会が二度ありました。さらに一昨年より北極に続けてふた夏行っています。

□ヒマラヤのほうではご研究のほか住民の生活を守る道を求めているようですが、その成果と発展途上国への援助ということをも含めてお聞かせ下さい。

■ヒマラヤ・ランタン谷というところの住

民は燃料に薪を採取し、森林破壊の原因と言われているので、燃料の代わりになるものとはいうことで住民が維持管理できる程度の水力発電を設置し電灯をともしてききましたが、まだ燃料になる段階ではなく今難しい所になっています。現地で見ていると薪採取が、はたしてヒマラヤの砂漠化につながるか、疑問点がたくさんあります。援助といっても大変難しくその国の住民の要望する形で行うべきで日本の場合お金だけが行って、人が行かないと不評をかっています。この環境科学というところは人を育てるところなので、どんな、ここを出た人が現地に行つて環境を考えた援助を出れるようになればよいと思っています。またそんな人を育てたいと思っています。この間、東欧に行つてきたのも国レベルで東欧に援助するのはもう決まっていたのですが、具体的にお金を出すのには環境問題に使うのがいいでしょう、しかも環境問題のなかでも相手国も喜ぶこれこれということ、海部総理に提言してきました。

□環境ミッションとして行かれてそのような貴重な提言をされることは大変重要に思います。

■そういう形のことを我々ほとんど出来ないようにしなければいけないし、国もまたそれにもとずいて計画をたてなければいけないとおもいます。

□東欧四カ国をまわられて印象はいかがですか。かなり公害が発生しているようです。

■日本で言ったら水俣病や四日市ぜんそくが発生している時と同じです。情報が押えられてきたために未だ公害としても認定されていなく、公害病とかそういう概念さえ

出来ていませんが今後大きな問題になると思います。いろんな意味で東欧は、ソ連の工場になり経済発展を追及していく事と、また日本の高度成長期での経済第一主義という事は、共産主義も資本主義も結局は経済第一主義になるとこのような問題が出て来るといふ事です。

むしろ環境教育となるとハンガリーのほうが小・中・高の学校でしっかりやっています。日本は今年の春、やつと環境学会ができるという状態で、環境教育などよい点は東欧に学ぶべきだと思います。

□最後になりますが、先生の今後のご予定と併せてお考えをお聞かせ下さい。

■今年の九月に地形学の学会を北大でやることになり「地形学と環境」というテーマで特に、川の問題をやろうと思っています。自然河川は北海道に、かろうじて残っているの、守ろうということも含めて自然の川を手本にして今の人工河川を自然のかたちにしていきたいと思います。だが災害は防がなければなりません、開発局などは手間暇かけた、自然にちかい仕事をすればいくらでもやる事がありますしね。そんな事をみんな考えていこうと思いません。経済学も法律もいろんな学問の体系の枠からでて、環境を考えていく状況になってきていると思います。

ありがとうございます。

以前からマルチ人間的雰囲気がありでしたがやっぱり、講演などで拝見した望遠の利いた、スライドの素晴らしい、極地にある可愛いお花も接写でバッチリ決めプロもビックリ。また研究室にはご自分で捕られた蝶の標本なども飾ってありました。

恵庭岳をめぐる問題の裏話

井手 貴 夫

長野県・岩菅山の冬季オリンピック問題に関連して過去の恵庭岳の問題について、二、三の裏話を記しておく。

当時私共は恵庭岳の使用にはあくまでも反対であった。それで北海道自然保護協会の運動とは別に、強硬派の理事の伊藤秀五郎、高倉新一郎、石川俊夫と私の四人で国際自然保護連合の総会を目前にして、これに訴え出て国際的な反対を盛り上げようと考えた。幸い連合の重要な委員であった当時のインスブルック植物園長ヘルムート・ガムス博士が私の親友だったので彼に相談した所、喜んでとり

ついでくれるというので、彼宛に英、独、仏、日四カ国語の反対声明を作って、彼を加えて五人の名前で発送した。その時の総会には日本の政府側も出席していたので、総会の反対決議は得られなかったが、ガムスは有力な殆ど全委員の反対署名を得て私宛に送り返してくれた。発起人の名前に彼を加えたので、大変やりにくかったといっているが、私は早速それを当時のIOCプランデージ会長に送った。プランデージは直ちにIOCにそれを伝えて善処方を求めたのでIOC

のスキー委員と私との交渉になった。私は恵庭の使用にはどこまでも反対で、富良野のスキー場を改良して使用することを主張して、どこまでもゆずらなかった。当時の国鉄の北海道総局長が、札幌・富良野間に特別列車を運行しようと申出された。

思いがけなくその時に、かねて自然保護についてもいつも励まして下さっていた元日本山岳会長の横有恒(よこ)さんから手紙が来た。「いつまでも主張していることは将来の貴方のためによくはないから、適当に妥協するように」という文面であった。もともとオリンピックを中止させるつもりはなかったので恵庭岳の使用後に一切の施設を撤去して、でき得る限り復元するようにと条件を出して、合意したのである。

しかしこのコース作りをしたIOCのコース選定委員のシェビースは、私の意見を入れて出来るかぎり、山容を破壊することなくコース作りをしたのであるが、余程このコースに愛着があったらしく、オリンピック終了後に幾度も会見の席上や、手紙で、再使用を私に要望して

来た。当時の厚生省の国立公園局業務課長大井道夫氏とは密接に連絡をとっていたが、この問題ではIOC会長と私との話合いがあったので、シェビースに私の承諾を求めさせたのであろう。私はどこまでも反対で、富良野を代りに勧めて、そのことはスキー連盟の伊藤義郎氏にも話した。結局その後富良野に国際コースをシェビースが作ったことは皆さんの知っている通りである。

当時のプランデージIOC会長は人格識見の非常に優れた人で、そのことはスキー連盟の前田宏氏も道新の連載「スキーと私」の中に書いていられるが、札幌オリンピック開幕の挨拶で、札幌開会の祝辞を述べると共に、しかしそのために貴重な自然が破壊されたことは誠に残念だったと述べた。たまたま西ドイツオリンピック選手団アタッシュェだった私はすぐそばで会長の言葉を感動深く聞いていた。そのあとの祝賀会の席上、私はプランデージ会長のもとへ歩みよって、特にこの言葉を話されたことに深く感謝を述べて握手したことであった。プランデージ会長のこの言葉は、私以外に言及

している者がなくようであるが、当時立会っていたIOCスキー委員はみんな聞いていたことである。ただこのことは誰も進んで話さないことなので、この機会にここに記しておくかねばならない。

オリンピックは人類の健康を目標としている筈である。今日環境を守ることは人類の健康を守る基本的な問題であることを言えば、その地方の一時的な催しのために貴重な環境が破壊されてはならない。長野県の賢明な解決を切に願うものである。

(北大名誉教授・当協会名誉会員)

編集部からのコメント

一九七二年の札幌オリンピック当時、当協会の理事長だった井手先生から、恵庭岳滑降コースの自然保護問題をめぐり、貴重な思い出話をいただきましたので、ご紹介しました。

なお恵庭岳の自然保護問題に対する当協会のとりくみとしては、一九六六・二・二〇付で、協会長からIOC会長あてに、大会終了後、スキー関連施設の撤去、跡地の植林による復元を要望しております。また、その前後の動きについて、井手先生が「会報」第八号(一九七〇)に「恵庭岳をめぐる施設」として報告されておりますので、併せてご参照ください。

岩菅山と恵庭岳

オリンピックと自然保護

当協会会長 八木健 三二

一九九八年冬季オリンピックのわが国の候補となった長野市は、スキー滑降コース開発問題をめぐって、スキーコース開発か、自然保護か、熱い議論を一年余にわたってつづけてきたが、つい「裏岩菅山コース」を決定し、さる二月二二日ローザンヌの国際オリンピック委員会（IOC）に正式に立候補の提出をした。ここに新しい局面が展開したのである。

長野冬季オリンピックのスキーはノルディックが白馬岳の八方尾根、アルペンが志賀高原と決められ、その滑降コースは志賀高原の最高峰岩菅山（二二九五）に開発が計画された。

志賀高原は上信越国立公園にあり、すでにスキー場は三十カ所、ゲレンデ面積は四八七畧、山ノ内町の四割を占め、ホテル、旅館は二〇〇に及び、年間利用者四六〇万をこえるという。

このように志賀高原はもはや開発の許容量をこえ、地元住民がすでに一九七三年「これ以上の開発は避け自然保護を進める」と宣言した程だ。

実は五〇余年前、東北大学の学生だった私は、長野県菅平から志賀高原にかけての火山地域を、一九三六―三七年の百数十日、地質調査をして卒業論文をまとめたことがある。同級だった三枝守維君（元三菱鉱業勤務）が隣の岩菅山から北

の火山地域を調査したので、時には境界の志賀高原で落ち合って温泉に入ったり、スキーを愉しんだりした（写真一）。当時は丸池と琵琶池に小さなゲレンデと、麻生、神津ヒュッテがあるだけで、広いスキー場はなかった。春にはシール（アザラシの皮）をはったスキーで、夏には通過できない地域を調査したこともあった。

昨年五月、二〇年ぶりに志賀高原を訪れて一巡したが、熊の湯から横手にかけて、スキー場が網のように連なり、さらに発着などをこえ奥に進むと焼額山に長大なコースが何本も走っている。シラビンやダケカンパの茂った山々はどこにいったのか。あまりにもひどい変貌にただただ今浦島の嘆きを禁じ得なかった。

そこからは雑魚（ザッコ）川をへだてて岩菅山がよく見えた。その岩菅山だけがスキー場で切りさかれることなく、昔のまま聳えているのを見たとき、初めて心の安らぎを覚えたのであった（写真二）。岩菅山こそこの地域全体でほとんど唯一、自然のまま残された貴重な山であり、二三〇〇近い稜線はハイマツ帯にお花畑があり、数十年前伐採された西斜面にも豊かな自然が回復し、クマ、カモシカなどの天国である。いままでもかたくなに、スキー場開発をこぼみつづけてき

た岩菅山の西斜面に、高度差八〇〇附近離三の男女の滑降コースが計画されているのである。

国内の四候補地を長野に一本化する過程で、全日本スキー連盟会長、日本オリンピック委員会（JOC）会長である国土計画社長堤義明氏の影響力が大きかったことは、関係者の言動からうかがわれるが、滑降コース設定の背後にも、氏の意向が深くかかわっているとみられることを多くの報道（注一）などが指摘している。なお焼額スキー場は氏の開発によるもので麓にはプリンスホテルがあり、岩菅山はその真正面にある。なお付言すれば、夕張岳ワールドスキー場を計画しているのも国土計画である。開発を禁止すべき岩菅山に、オリンピックを口実にスキーコースをつくるのは、結果的には国家事業により私企業の発展を図ることにほかならない。これを堤氏は何と説明しようとするのだろうか（注二）。

このような事情から自然保護関係者は、岩菅山のスキー場開発に強く反対しており、長野県自然保護連盟、日本自然保護協会をはじめ、日本生態学会、日本哺乳類学会など多くの団体が長野県内の既存のスキー場を使用し、岩菅山開設に反対する要望書を提出している。一方オリンピック招致委員会内に設け



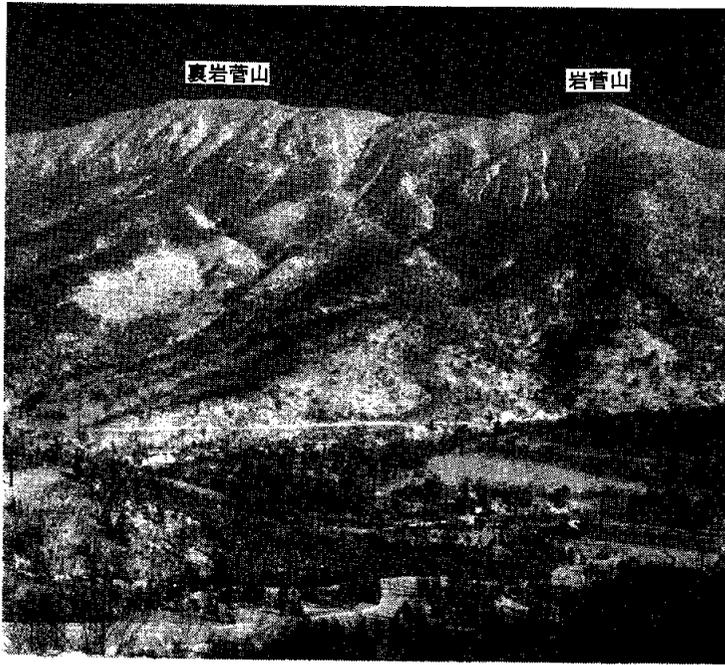
1. 丸池の麻生ヒュッテ前で
左三枝君、右八木(1937年春)

られた自然保護専門委員会は、岩菅山に関する調査報告書（注三）を検討し、岩菅山は問題があるが、一・五キロ北によつた裏岩菅山ならばほぼ合格とし、一項目の条件をつけて、そのコース開発を支持した。これをうけて、長野市が「裏岩菅山コース」と前提として、IOCに立候補届を正式に提出したことは、冒頭に記した通りである。しかし「裏岩菅山」とはいくものの尾根つづき、わずか一・五キロ北にズラしただけで、本質的には殆ど変わっていない。

ここで思い出されるのが一九七二年札幌冬季オリンピックの招致が決定した一九六六年、支笏洞爺国立公園内の特別地域恵庭岳に滑降コースが設定されたことである。当時はまだ自然保護の世論は、現在ほど大きくはなかったが、北海道自然保護協会はこれにつよく反対し、最後の妥協案として競技終了後全施設の撤去と、伐採跡の植林による復元の二条件を要望した。厚生省はこの条件で使用を承認し、約束は守られた。しかし、一七年

の歳月と二億四千万円を費やし、人工的な森林は育ったものの、周辺の自然林に比べると本格的な復元には程遠く、自然の破壊がいかに易く、復元がいかに困難かを示している(注四)。なおこのような自然保護問題に関与した経験をふまえ、当協会は裏岩菅山周辺のコース新設に反対し、既存スキー場を用いるべきことを、さる一月一三日長野招致委員会宛に要望した(注五)。

員が前に書いておられるが、とくにブランドページIOC会長の自然破壊をわびた発言が印象的である。氏はその著「近代オリンピックの遺産」の中で「札幌大会は大成功だった。将来これほど素晴らしい大会はあり得ないだろう」とのべているのは、北海道人の一人としてうれしい。にもかかわらず、ブランドページは「一九二四年オリンピック冬季大会を創設したことは、オリンピックのイメージを損ねた憂うべき失敗であった」と記している(注六)。



2. 焼額山から見た岩菅山の連峰、右下にプリンスホテルが見える。(1989年冬)

その理由の最大なもの、とくにアルペン・スキーでの著しい商業主義の横行と、自然の破壊であった。こうした点から見ても、ブランドページ氏はオリンピック精神に根ざしたしつかりとした哲学をもっている。その点、現IOC会長サマランチ氏はプロ選手の参加を認め、徹底した商業主義を導入するなど、いささか哲学には欠けるとの評がある。またわがIOCも堤会長以下、資金集めや選手強化ばかりに精力を集中し、オリンピックに対する基本理念を示さないのは、まことにもの足りない。

さて冬季オリンピックと自然保護とのかわり、大きな波紋を投じたのは、札幌のあとに決定していたデンバーが、ロッキー山地の自然破壊を恐れた住民投票の結果、開催を返上したことである。また一昨年IOC本部のあるローザンヌでも、九四年開催への立候補を住民投票により断念した。さらにスイス、フランスなどアルプス周辺の七カ国の自然保護団体が「今後冬季オリンピックは既存施設のある処で開催すべし」と提唱しているのは、自然保護重視の国際世論の動向を示すものである。

こうした視点から、私は国際スキー連盟(FIS)が、スキーコースの設定に、たとえば滑降は高度差八〇〇メートル距離三キロというように、厳格な規程を要請することに疑問をもっている。スキー競技は、世界記録、日本記録といった記録をもたない唯一の(?)スポーツである。コースの斜度、難易度、雪質に風といった自然条件により、コースの距離は同じでも絶対的な記録が得られないことによる。したがって規格に少々はずれても、同一コースで優劣を競えばよいことになる。

つまりオリンピックのアルペンでも、たとえ規程には少々欠けていても、既存のスキー場を用いるようにすべきであろう。八四年サラエボ冬季大会では、滑降コースの高度差が少し不足だったので、建物の屋根がスタート台になったという笑えない話がある。

このように自然保護の問題がもっとも重要となつて今日、スキー場が過飽和の志賀高原に、殆ど唯一つ自然のままに残された岩菅山地域に巨大なスキーコースを開発し、しかもオリンピック後もそのまま使用するの、言語道断といわざるを得ない。二〇年も昔の恵庭岳コース設定よりも、さらに後退したこの案に固執する限り、自然保護重視の姿勢を示すIOCは、長野を指名することはあり得ないであろう。裏岩菅山コース案を白紙に戻し、既設スキー場を用い自然と共存する長野オリンピックを開催しよう、再検討することを要望する。

〈注一〉 たとえば「朝日新聞」一九九〇・一・二七
 〈注二〉 本多勝一月刊「はこべ」一九九〇、一月号
 〈注三〉 主に信州大学教授らより構成された志賀高原岩菅山自然環境調査委員会の「志賀高原自然環境調査報告書」六三―八ページ、一九八九年

〈注四〉 八木健三「五輪大義の自然破壊やめよ」朝日新聞一九八九・九・二七、「論壇」NC七〇号
 〈注五〉 アベリー・ブランドページ著「近代オリンピックの遺産」ペー
 スポール・マガジン社、一九七四年

援を訴えたところ、その働きかけによりI
OC会長ブランド氏がJOCに善処を
求め、自然保護への配慮がなされました。
こうして競技が無事終わり、上記二条件の
約束は守られました。人工的な森林は
育ったものの、周辺の自然に比べると本格的
な復元には程遠く、自然の破壊がいかに
易く、復元がいかに困難かを示しています。
札幌オリンピックでは、回転と滑降は五
〇キロほどだった手箱・恵庭二会場で立派
に遂行されたことは周知のとおりでありま
す。

今回滑降コースの候補にあげられた若首
山周辺の新設スキー場開発に対しては、日
本生態学会、日本哺乳類学会をはじめ、様々
の自然保護団体、山岳団体からも、自然環
境の破壊を憂慮する意見書、要望書が出さ
れており、オリンピック開催にあたり自然
保護に十分配慮すべきは、国内外の世論と
なっております。

このような現状において、従来の行きが
かりにとらわれ、あくまで若首山周辺地域
に固執することは、自然保護を重視するI
OC首脳部の意向により見て、長野招致の
可能性をつぶすおそれが多分にあると考
えられます。以上のごとき札幌オリンピック
の経緯をふまえ、貴委員会が自然環境保全
の世論に答え、県下の既存スキー場を利用
し、自然と共存する理想的な長野オリン
ピックの実現にむけて努力されることを望
むものであります。

NCコース



(会場記載のないものは
事務所で実施・敬称略)

一九八九年第七回常務理事会 (拡大)

一九八九年十月十二日

出席者 八木健三、俵浩三、鮫島惇一郎、

中野徹三、紺谷友昭、福地郁子、柳沢信
雄、熊木大仁、平井百合子、前田重和(十
名)

報告
一、北海道生花商協同組合より十萬円の
寄付があつた旨報告がなされた。

一、九月度決算報告

高橋事務局長より説明があり了承さ
れた。

二、知床森林生態系保護地域設定の件

道営林局が提示した保護地域設定案
を検討し、同設定案の問題点について
協会の意見統一がなされた。後日、当
協会、連合及び知床自然保護協会の三
者で検討し、道営林局と話し合うこと
が決まった。

三、千歳川放水路セミナーの件

過去四回行われた開発局との勉強会
の結果を踏まえて、十一月十五日に苦
小牧において「千歳川放水路セミナー」
を開催することが報告された。

四、夕張岳スキー場問題について

夕張岳シンポジウムを成功させるた
め、積極的に協力することを確認した。

五、その他

熊木理事より「森林の保健機能特別
措置法案」の問題点について説明がな
され、同法案の廃案を求める要望書を
作成することが決まった。

一九八九年第八回常務理事会 (拡大)

一九八九年十一月十七日

出席者 八木健三、三浦二郎、俵浩三、

鮫島惇一郎、紺谷友昭、福地郁子、柳沢
信雄、熊木大仁、前田重和(九名)

報告
一、知床森林生態系保護地域設定の件
協会、連合及び知床自然保護協会の
三団体名で道営林局に意見書を提出し
た。

二、森林特別措置法案の件

同法案の廃止を求める陳情書を農水
大臣、各政党他に提出したが、残念な
がら衆院特別委員会を通過してしまっ
た。

三、野付風蓮道立自然公園現地視察の件

車道延長をメインとする「野付地区
施設計画」につき、道自然保護審議会
委員である三浦副会長より、現地視察
の報告があつた。

四、幌村建設より依頼のあつた講演会の
件

十一月十四日にプログレス日高(事
業経営者二世の会)主催、日高支庁後
援で「開発と自然保護」をテーマに八
木会長と紺谷理事が講演をした。

五、夕張岳シンポジウムの件

八木会長が実行委員長 前田理事が
協会窓口となる。夕張市長から、シン
ポジウムには出席できないがメッセー
ジを送ること、また国の天然記念物指
定については国や道からの財政的うら
づけがあれば何時でも要望する回答が
あつた旨が報告された。

一九八九年十月十二日

出席者 八木健三、三浦二郎、俵浩三、

高橋事務局長より説明があり了承さ
れた。

二、夕張岳スキー場問題
いまだに計画書が提出されていな
い。

三、千歳川放水路問題

特別な動きはないが、「道開発局の解
答を検討する」というセミナーが開催
され、二〇〇人の出席者があつた。

四、その他

① 虹田町の原野を寄付したい旨申し
出があつたが、登記費用もかなり協
会としてはそぐわないため断ること
とした。

② 梅沢俊氏を通して花の名店会より寄
付の申し出があつた。

③ 今年度の講演会を次の通り開催する
ことが決まった。

一月 藤原信氏(宇都宮大学教授)

二月 小野有五氏(北大教授)・神原昭
子氏(消費者連盟幹事)

第一一六回理事会

一九八九年十二月十六日

出席者 八木健三、三浦二郎、俵浩三、
中野徹三、紺谷友昭、福地郁子、吉元豊、
寺島一男、中川元、平井百合子、熊木大
仁、前田重和(十二名)

報告

一、森林特別措置法について
協会より提出した要望書に対し、共
産党道本部から返事があつたのみで
あつた旨報告された。

二、知床森林生態系保護地域設定の件

一九八九年十月十二日

出席者 八木健三、俵浩三、鮫島惇一郎、

中野徹三、紺谷友昭、福地郁子、吉元豊、
寺島一男、中川元、平井百合子、熊木大
仁、前田重和(十二名)

十二月十五日の委員会で、保護地域を横断道路より更に西に拡大すべきとの意見を述べた旨報告があった。

三、夕張岳シンポジウム及び夕張岳スキー場問題

夕張岳シンポジウムは十二月二日、三日の両日で約二五〇名の参加があり、内容的にも経済的にも大成功であった。しかし協会からの要望に対しては夕張岳から何の返答もないこと等が報告された。

議案

一、十一月度決算報告

高橋事務局長より説明がありました。承された。

二、千歳川放水路関係

日本野鳥の会苦小牧支部及び苦小牧自然保護協会より苦小牧市長に対し、ウトナイ湖及びその周辺地域がラムサール条約指定地となるようはたらきかけているとの説明があり、協会もこれを支持することとした。

三、入退会者承認の件

A会員八十一名、B会員七名、学生会員六名、団体会員三件の入会が承認された。又七十九名の個人と一団体会費未納により退会とすることが承認された。

四、役員選出の件

役員選出方法を改めた方が良いとの意見が出され、次回常務理事会で更に検討することになった。

五、その他

①ゴルフ場問題につき種々意見が出されたが、次回理事会で引き続き検討することとなった。

②スウェーデン国王の米道を機に、環境問題シンポジウムが開催されるが、協会もシンポジウム実行委員のメンバーに加わることが承認された。

役員改選について

同封「理事改選の公示」にありますように、今回は役員の改選を行いますので、よろしくご協力をお願いします。

寄贈図書

- 寄贈者 道内女性史研究会 田尻聡子 「道内女性史研究第六号」
- 寄贈者 三浦二郎 「根室その水の青―森の緑を(その三)―」
- 寄贈者 尾瀬の自然を守る会 加藤久晴 「尾瀬は病んでいる」
- 寄贈者 富山県自然保護協会 「ナチュラリスト・ハンドブック」
- 寄贈者 野生生物情報センター 「ワイルドライフ・レポートNo.10」
- 寄贈者 北海道新聞社 「はまなす国体グラフ」
- 寄贈者 日本消費者連盟 神原昭子 「もういりません!ゴルフ場」
- 寄贈者 大雪と石狩の自然を守る会

「スタブカムシベ集録誌第二集」
寄贈者 桑原 宏 「桑原宏画集」
寄贈者 本多啓七 「日本アルプスにおけるガキ田の生態」「黒部の水とその特性」

寄贈者 成瀬廉二 「山岳雪崩の危険予知と避難行動の検討」
寄贈者 勸前田 一步園財団 「阿寒湖地区自然環境基礎調査報告書 一九八九年」

寄贈者 北海道生花商協同組合 「北海道生花商協同組合三〇周年記念誌」
寄贈者 苦小牧市環境衛生部 「苦小牧市の環境(平成元年版)」

寄贈者 北海道保健環境部調整課 「北海道環境白書89」

寄付金

坂本ツル様より坂本直行画伯の作品売上金六三、五〇〇円をご寄付いただきました。

その他次の方々から寄付をいただきました。
神原 昭子 三、〇〇〇円
(株) 秀岳荘 五〇、〇〇〇円

☆ありがとうございます(敬称略)

事務局より

本年度もお陰様で協会事務も無事終了することができました。これ一重に会員皆様方のご支援ご協力は勿論、事務のアルバイトの方ボランティアの方々熱意あるご協力の賜ものと心から感謝申し上げます。

今後ともよろしく願います。この頃、家族で会員になられる方が増えてまいりました。いままで四人家族が最高で武田誠一郎さんと小野栄二さんの二家族でした。

今度、五人の家族会員として佐藤捷彦さんが入会されました。ありがとうございます。これからも家族会員のご入会を心から歓迎いたします。

一九九〇年三月十六日発行

〒札幌市中央区北三十四-1 加藤ビル5 六階
発行所 社団法人 北海道自然保護協会
電話 (〇一一) 二五二-1546 五
発行人 八 木 健 三
印刷 株式会社北海道機関紙印刷所